

# 音楽療法からみた梁塵秘抄

村井 満恵

## 序

音楽療法では対象者に関する情報を基にして、セッションを組み、対象者とセラピストの音楽的な双方向的交流を通して、対象者の感情や行動を変容させていくことを目指す。

歴史や文学の中から音楽療法的事象を汲み上げるためには、その時代の庶民や貴族の生活の様態を知ることに加え、彼らの感情生活がどのようなものであって、社会構造の中でどのような葛藤的事態が引き起こされていたかを知ることが必須のことになる。その中で音楽は療法的な意味を獲得し、人々の生活の支えとなることが出来るのである。

この研究ノートでは、「梁塵秘抄」に取り上げられた中世の庶民の歌謡が、その時代の人々にとってどのような心理療法的な効果を持っていたかを探ることを目的とする。

## 1. 「梁塵秘抄」概要

「梁塵秘抄」は平安末期から中世にかけて民衆の間にひろまった今様を、後白河院(1158～1199)が撰集した歌謡集で、20巻(歌集10巻と口伝集10巻)からなるが多くは散逸し、全体の巻数については不明な点が多い(渡辺2004)。現在では「梁塵秘抄」巻1(断簡)と「梁塵秘抄」巻2、「梁塵秘抄口伝集」巻1(断簡)、「梁塵秘抄口伝集」巻10のみが伝存している。このうち「口伝集」巻10は「群書類従」に収められていたが、「梁塵秘抄」巻2の歌謡集が発見されたのは、明治44年(1911)の秋のことであり、大正元年(1912)8月活字本が世に現れた(小野 1999: 93-97)。

「口伝集」巻1は、歌謡についての簡単な歴史、目的、種類が書き記され、一部分が伝えられている。伝存している「口伝集」10巻は、後白河院が今様へ傾倒していった過程が自伝的に書かれている。「昼はひねもすうたひ暮らし、夜はよもすがらうたひ明かさぬ夜はなかりき」(口伝集第2巻)等、今様に明け暮れ、今様の秘蔵の曲を知っているものがあると聞けば、呼び寄せて歌わせ、今様歌手の中で自分と

声を合わせて歌わぬものはないと自ら記す熱狂ぶりであった。院は今様を学ぶために、本来なら宮廷に昇殿することすら出来なかった傀儡子、遊女らを招き入れた。院は、傀儡子の乙前から専門的に学び、今様が伝承されることを願った。と同時に歌謡が庶民の精神的発散、高揚に効果があり、声を発して「歌う」という行動が抑圧された人々の精神的な平穏を維持し、人々の相互の理解を得ていくことを確信していたのであろう。庶民にとって今様が書きとどめられるか否かは問題ではなく、その場において人々は歌い、自己の存在を表現することに意味を求めた。今様は口承されていくなかで、多くは消滅していったであろう。「声わざの悲しきことは、わが身亡れぬるのち、とどまること無きなり。」(口伝集第2巻)とあるように、歌謡というジャンルが書き記されず、消えていくことを嘆き、後世のために記した次第が口伝集に記されている。「梁塵秘抄」では音楽についての記述は少ないが院が歌い方について「様」という言葉を用いて、節回しに言及している。ここには継承という側面を強調した日本的な音楽の伝統を見ることが出来、庶民的な伝承の世界と個人的な伝統維持という側面が述べられている。

次に「梁塵秘抄」の歌詞集巻1と巻2の構成について述べる。

表1の古柳、今様、法文歌、四句神歌、二句神歌に見られるように巻1、および巻2のそれぞれの冒頭の目録に書かれている歌の数と実際の歌数は異なっている。今様という名称の分類は巻1に265首とあるが、実際には10首のみが残されている。この場合の今様は狭義の今様、すなわち「只の今様」あるいは「常の今様」と呼ばれる。広義の今様には長歌、古柳、法文歌、神歌なども含まれる。また梁塵秘抄のそれぞれの項目はさらに表2のように歌の種類が題目別に分類されている。

## 2. 今様と仏教信仰及び今様の霊験

表1に見られるように、巻2における法文歌は220首であり、巻2の約40%を占めている。後白河院は今様を歌うこ

表1 「梁塵秘抄」の構成(巻1, 巻2)

	巻1 (目録)	実際の 収録歌数	巻2 (目録)	実際の 収録歌数
長歌	10首	10首		
古柳	34首	1首		
今様	265首	10首		
法文歌			220首	220首
四句神歌			170首	204首
二句神歌			118首	121首

表2 巻1・巻2の収録歌内容

	長歌	祝1・春2・夏1・秋1・冬2・雑3
巻1	古柳	春1
	今様	春2+8
巻2	法文歌	
	仏歌24・華嚴経1・阿含経2・方等経2・般若経4・無量義経1・普賢経1・法華経114・懺法歌1・涅槃歌3・極楽歌6・僧歌10・雑法文歌51	
	四句神歌	
	神分35・仏歌11・経歌7・僧歌12・靈験所歌9・雑130	
	二句神歌	
	49・神社歌72	

とは即ち仏教信仰における極楽往生であると説いている。法文歌は仏教を背景としつつ、生老病死に悩める魂を活気づけ、慰さめ、ある時は人事を越えた力を発揮すると記されている。巫女が後世の成仏を願う院にぜひ今様を歌うようにと神託を告げる。「我に申すことは必ず叶ふべし。後世のことを申すこそ、あはれにおほしめせ。今様をきかばや」口伝集巻10とあり、後白河院は「四大声聞いかばかり喜び身よりも余らん われらは後世のほとけぞと たしかに聞きつる今日なれば」と歌ったと記されている。この歌は巻2の85歌の法文歌であるが、口伝集の別の箇所においても延寿という女芸人が院から今様を伝授され、うまく歌えたことを院からほめられたとき、喜びを表現するために歌われている。

社会における極楽往生という仏教信仰を背景とし、院の仏教信仰と傀儡子が極楽往生を祈願する気持ちが重なり、今様を歌うことと仏教が共振したといえる。信仰心を持って今様を歌うことが神仏の動かす力となり、さまざまな靈験も生まれてくる。「像法 転じては 薬師の誓いぞ頼もしき ひとたび御名を聞く人は よろずの病ひを無しとぞいふ」(巻2の32及び口伝集巻10に2箇所)、これは堅物清経がもはや絶望というとき、歌ってたちどころに病が治ったという歌であり、乙前が病床のとき院が歌って励ました。「たとひ また今様を歌うとも、などか蓮台の迎へにあづからざらむ」(口伝集巻10)。このほかにも靈験が報告され、盲目のものが、御社にこもって今様を百余日、一心不乱に歌い、目が開いて出てきたなどの靈験が述べられている。

今様が靈験を持ったことについて、小野は「それを支え

たのは文字業としての法文歌が単に仏典に関する内容を盛り込んでいるだけでなく、…表現の力によって仏徳讃歌に見事に生まれ変わり、靈力すら備えているという今様観であろう」(小野 1996:28)と述べ、また馬場は今様の靈験が今様往生論へと展開していく経過について「心澄む」境地を挙げている(馬場 1987:41-55)。

### 3. 歌詞の多様性

#### <社会・生活・人生>

以上のように「梁塵秘抄」は仏教を主題としたものと共に、巻2のおよそ300番以降、当時の社会、下層の民衆の生活を反映した歌謡が多くなり、その多様さ、活力には驚くばかりである。社会や我身を風刺し、悲哀をさらけ出した現実への直視は時に生活の閉塞感を打破し、人々の共感を呼ぶ。社会の風俗を歌ったものも多く、流行の衣服、髪型など当時の風俗を歌った歌、男女の愛欲、新米巫女をからかったもの、老いた巫女の嘆き、歩き巫女のわが子を案じたもの、恋愛の歌、政治を風刺した歌など内容は広範である。また「古い」をテーマとしたものは16首あり、過去を嘆いたもの、老いの苦悩が語られる(馬場 1987)。今の現世の姿から過去を振り返り、未来(来世)に思いをめぐらす。当時の人々の人生観が歌われ、時代を超えて現代でも共感を呼ぶのであろう。「われは何して老いぬらん 思えばいここそあはれなれ 今は西方極楽の 阿弥陀の誓ひを念ずべし」(235)などはその例である。また「遊びをせんとや生まれけん 戯れせんとや生まれけん あそぶこどもの声聞けば わが身さえこそ揺るがるれ」(359)は遊女が身を揺るがす悔恨を歌ったものという説と童子の遊び戯れる声にわが身の動き出す衝動を覚えるという説がある(吾郷 1971:91-103)。集団で歌われた今様の歌詞が一人一人の思いを伝えている。その親近性が当時の庶民の心に響き、集団的な共感を呼び、一大流行をもたらしたのであろう。

#### <物は尽くし>

「梁塵秘抄」には「物は尽くし」という形がしばしば見られる。「よくよくめでたく舞ふものは」「心すむものは」「常に恋するものは」「博打の好むもの」「遊女の好むもの」「ふしの様がるは」など、さまざまな題材、階級を設定したもの、また「聖の住所はどどこぞ」など問いかけで始まるものもある。言葉の遊びを引き出し、連想的に次の言葉へと紡がれていく。「物は尽くし」を歌うのは、梁塵秘抄が集団で楽しまれた歌謡であることを示している。これらの歌に登場する「物」は誰にでも理解できる共通した単語で、「言葉」が人々の心を豊かにしコミュニケーションのきっかけを作

り出していくことが示されている。今様が共同体的な土壌の中で培われたのだと考えることができる。

#### <童謡・民謡的歌謡>

「梁塵秘抄」にはさらに童謡風のものも含まれている。

「舞へ 舞へ 蝸牛 舞はぬものならば 馬の子や牛の子に蹴させてん…」(408)。そのほかとんぼ「みよ みよ 蜻蛉よ…」(438)や独楽(439)など、子供の言い回し、掛け合いがいかに童謡的なのである。

また巻1「長歌」の10首の冒頭に「そよ」という囃し詞が付いている。「そよ わがやどの 池の藤波咲きにけり 山ほととぎす いつか来なかん」(4)。また1首伝えられている古柳は「そよや」「よな」「やな」「や」「なにな」など歌詞が挿入されている。男女の親愛の情を装飾したともいわれているが、節を付けて集団で歌う場合に、このような掛け声や囃し詞がいつそう人々の共感を誘い、音楽を介して人々が心を通い合わせる方法のひとつと考えられる。

#### 4. 音楽療法的観点から

音楽療法的な立場からみて、「梁塵秘抄」は日本人の音楽観を知る基礎的な資料であると考えられる。今様はこの時代に生きる人々にとって自己表出の場であり、歌の中で思う存分に批判をしたり、皮肉を言ったり、わが身を嘆きながら、神仏に最終的な幸せをゆだねたりする。文字で書き連ねることのなかった庶民にとって、生活の労苦を発散するには、言葉を用いた歌がもっとも容易な表現手段であったであろう。「梁塵秘抄」に表現されたような心理の表出からその時代がいかに閉塞的であったかがうかがわれる。

和歌の世界で歌われている春夏秋冬の自然、恋愛感情など日本人の持っている美的なものへの憧れとはまた別の庶民の心理の直接的表現が「梁塵秘抄」には歌われている。庶民は娯楽性、滑稽さを歌うことで日常の生活を活気づけようとしているかにも見える。その自己表出の背景に今様を歌えば往生出来るという庶民の願望が託されていることがこの今様の流行を促したと考えられる。仏教も俗世界も同

一の次元で歌い込まれていく今様の世界は庶民の感情の歴史を知る貴重な時代の産物であるといえよう。彼らがどのように歌を聴き、どのような歌を歌ったのか、受容の歴史は庶民の一人一人の心の在りようを歌い上げた「梁塵秘抄」の中に刻まれているのである。

今様は墨俣、青墓(現在の岐阜県)において、それを相承する傀儡子の集団を始源としているとされ、形あるものとして後白河院が後世に伝えることになった。貴族社会から武家社会への時代的变化、庶民の閉塞感、歌謡の流行は底辺で関連していることが伺える。「梁塵秘抄」は日本の文化における音楽療法的癒しのひとつの表れとして、現代の私たちにその姿を現しているのではないだろうか。

本研究ノートでは日本の古典的な書物から音楽がどのように庶民によって受容されたかを「梁塵秘抄」を基にして考察した。「梁塵秘抄」を今様という庶民の歌として眺めるとき、歴史の中に形を残すことが少ないと思われる庶民の音楽の関わり方を表す音楽療法研究の資料として価値をもって来ると思われる。

#### 引用・参考文献

吾卿寅之進

1971 『中世歌謡の研究』東京：風間書房。

乾 克己

1992 『中世歌謡の世界』東京：近代文藝社。

榎 克朗(校注)

1995 『梁塵秘抄』(新潮日本古典集成第31回)東京：新潮社。

小野恭靖

1996 『中世歌謡の文学的研究』東京：笠間書院。

1999 『歌謡文学を学ぶ人のために』京都：世界思想社。

小西甚一(校注)

1953 『日本古典全書』東京：朝日新聞社。

馬場光子

1987 『今様のこころとことば—梁塵秘抄の世界—』東京：三弥井書店。

渡邊昭五

1992 第3版『梁塵秘抄の風俗と文芸』東京：三弥井書店。

2004 『梁塵秘抄にみる中世の黎明』東京：岩田書院。

2005 『梁塵秘抄の恋愛と庶民相』東京：岩田書院。

(むらい みつえ 音楽療法)